ワイン・カリフォルニア

文＝岡田カーヤ text：Kaya Okada
絵＝nakaban illustration：nakaban
選者＝中川誠一郎 selection：Seiichiro Nakagawa
coordination：Sonoe Hirabayashi

フリーマン・ヴィンヤード＆ワイナリー

Freeman Gloria Estate Pinot Noir Russian River Valley

リビングの大きな窓からは、なだらかな斜面の畑に植えられたピノ・ノワールが葉を茂らせているのがすぐ近くに見える。「うちは井戸水だから、畑に蒔いたものが戻ってきちゃう。そんなわがままな理由で有機栽培にしているんです」。日本人女性で唯一カリフォルニアにワイナリーを所有してワイン造りを行うアキコ・フリーマンさんは、たおやかに微笑む。

夫であり設立者のケン・フリーマンさんとともに、大のブルゴーニュワイン好き。いつかワイナリーを持つという夫妻の夢のためいくつもの土地を視察し、ソノマのロシアンリバーバレーに決めたのはその土地柄から。海に近いため、比較的冷涼な風が吹く。夕方から発生する霧は翌日昼前には消え、日が燦々と降り注ぐ。一日の寒暖差が大きく、ブドウをゆっくり熟れさせるから、美しい酸がそのまま残る。「この土地ではするべきときに、するべきことをしていたら、当たり前のようによいブドウができるんです」。

とはいえ2001年の設立後、試行錯誤の数年があった。「当初はブルゴーニュ的なものを造ろうとしていたんです。でも、どうしたってブルゴーニュにはなりません。なんといっても違いはお日さま。よく照るのでブドウが熟れる。だったらその特徴を活かして、エレガントでおいしいカリフォルニアのワインを造ろうと思えるまで、5年はかかりました」と振り返る。

やがてアキコさん自身が醸造を担当するようになって、収穫時期を若干早め、熟成時の新樽率を減らしていった。「ワインと樽の関係って女性とお化粧だと思っているんです。元がきれいだったら、いろいろなことをする必要はなくて、軽くタッチアップしてさらにかわいくしてあげればいいの」。

ピノ・ノワールはバラの香りに喩えられることが多いけれど、アキコさんの手掛けるものはラベンダーやオレンジも感じられる複雑な香気。活き活きとした果実とともに、気品と意志の強さが感じられる。

おいしい一言

「ワインは人生をおいしくするスパイス。なくてもいいけれど、あったら確実に豊かになる」

アキコ・フリーマン

おかだ・かーや　フリーランスライター・編集者。旅と日常の間で、人々の営み、土地に根ざした食などの記事を書く。

なかがわ・せいいちろう　ワイン収集家の2代目として週に数回、仲間と飲み交わす。著書に『ボトルの中には夢がある』（木楽舎）。